



Alt-Focus GRAPH

十人十色のフォトストーリー

2014年5月 第2号

初めての作品展を終えて

初経験4人による座談会

～それぞれの作品展とこれから～

2月12日から16日の5日間、目黒区美術館区民ギャラリーにて第6回アルトフォーカス受講生作品展が開催されました。参加した受講生は総勢25名、作品点数は100点におよびました。今回は受講生25人のうち写真展の経験が初めてだった飯島、中島、伊井、田口の4人が集まり、作品展に参加して学んだこと、今後の抱負などについて田口が司会役を務めながら話しました。

作品展を通じて経験できたこと

田口 今日は写真の展示が初めてだった4人が集まりました。まず、ご自分にとって受講生作品展への参加がどんな体験だったか感想をお聞きしたいと思います。

飯島 参加して本当によかったです。すごく楽しかったです。今回の楽しさは「どの写真を出そう」という選ぶことの楽しさでした。写真だけでなく額選びにも悩み、ネットで探したりしたのも初めての経験でした。また写真展期間中には他の出品者の方々と一緒に作品を見て回り、じっくりと作品を鑑賞できたことはとても勉強になりました。



第6回受講生作品展。

ゲストと出品者が作品について話し合えるのも特徴



「空に続く道」(田口) 写真を18枚までに絞り、最後に選んだ1枚がこちら

田口 苦労した点はなかったですか？

飯島 やはり作品選びです。3点の作品のうち1点は一度撮ったものが気に入らなくて、こことここに気を付けようと思直してからもう一度撮りに行きました。作品展の前にプリント体験講座(協力：(株)ピクトリコ)があり、紙選びも楽しめました。作品は3点すべて違う紙のプリントです。

中島 作品展が終わってみると楽しかったなと思えますが、私は自分の写真を人に見せるというプレッシャーが大きかったです。自分では好きだなと思える写真が人にはどう思われるのだろうかということがすごく気になりました。でも写真を見に来てくれた皆さんからいい感想をもえたので、それがすごくうれしかったです。

田口 どのような感想だったのでしょうか？

中島 「色が鮮やかできれいですね」とか、「影の使い方が上手ですね」などでした。作品をよく見てくださり、こうした言葉をもらえたことが自分の自信にもつながりました。

田口 それはうれしいですね。

伊井 私は去年の作品展を見に行つて、その勢いでエントリーしました。まずは何か撮らなければと思っていたのですが秋まで何も撮れずにだんだん焦ってきました。作品が決まらないことには額も何も決められません。最後は毎週末、近所に撮りに行きました。結局作品展に出した作品はアルトフォーカスの撮影会で撮ったもので、やはり集中力があつたこと、いろいろと考えながら撮ったことなどが作品に表れているのかなと思います。展示した瞬間は恥ずかしかったのですが、「伊井さんらしさが出てますね」と言ってもらえました。皆さんの作品を見てみると、それぞれに「らしさ」というものがあるなと

思いました。これからも「らしさ」という事を意識して撮っていきたいです。

田口 私も作品選びには本当に苦労しました。私の場合、作品点数を1点にしてしまったので(笑)。1点にした理由は決してすごく自信があるものが1点あった訳ではなく、1枚撮れるかどうか自信がなかったからなのですが、それが結局自分を苦しめることになりました。18枚まで写真を絞ったのですが、結局1枚を決めることができず、最後は他力本願の道を選びました。18枚の写真をいろいろな人に見てもらい、好きな写真に投票してもらうという方法です。ところがこの結果、断トツ1位というものがなく見事に横並びでした。それで好きとかいいなとか感じる写真は人それぞれ違うのだなということを知りました。

今後の撮影にむけて

飯島 展示経験者の皆さんの作品を見ると、テーマがありましたよね。初めてだとそこまでは出来なかったのですが、来年はチャレンジしたいなと思いました。

田口 私もそれを感じました。もうすでに来年の展示用のテーマを考えている自分がいます(笑)。

伊井 私も今回は2枚でしたが、雰囲気でも何でもいいと思うのですが、何か関連性があるほうが一人の人の作品になるし、見る側にも訴えるものがあっていいなと思いました。

飯島 色だったり、場所だったり、動物だったり、テーマもいろんなアプローチがあるのですね。テーマで作品を出されている方の作品は印象に残りました。

中島 私はまだ今後のテーマまでは考えていませんが、とにかく「もっと写真がうまくなりたい」という気持ちが強くなりました。他の方の作品を見て、明確に目的があって撮っていると感じました。これからは「これが撮りたい」という目的をもって撮りたいです。写真だけでなく額縁、マットも含めてひとつの作品を作り上げることに挑戦したいです。

飯島 私も今のところ「こんな写真を撮りたい」という目標が持てています。それも写真展に参加したからですね。目標を持つということは楽しいですね。

伊井 今回自分の作品をプリントしてみて、ブレずに撮るにはやっぱり三脚が必要だなということも感じました(笑)。道具として撮影に持って行こうと気持ちが変わりました。せっかく三脚を持っているのに使いこなせていないのは「もったいない」ですよ。



「紅桔梗」(飯島) 自分でも好きと思える作品。F1.8の明るいレンズで撮影



「秋の足音」(中島) アルトフォーカス撮影ツアーでの1枚。「影がいいね」という感想が嬉しかった

飯島 私は枚数をたくさん撮ろうと思いました。やはり他の方々の作品を拝見していて、皆さんいろんなところで撮影されているんだなと感心しました。撮る機会をもっと増やしたいですね。

中島 私もいつもは旅行にしかカメラを持って行っていなかったのですが、もっと撮影目的でカメラを持ち歩きたいと思いました。おもしろい発見を期待して、あちらこちら出歩きたいです。

座談会のメンバー。左から田口、飯島、中島、伊井。初めての写真展を経験し、早くも次の作品に向けて意欲的



難しさと楽しさ

田口 他に初めて展示を経験して感じたことはありますか？

伊井 タイトル付けが難しかったです。最後まで悩みましたが、見る人を混乱させるような難しいものはやめようという結論になりました。

飯島 私の場合、タイトル付けは何を撮りたかったのかを掘り下げていくきっかけになりました。結果、自分の写真をじっくり見ることもになりました。

中島 こんなに自分の写真をじっくり見ることはなかったです。でもやってみると楽しかったので、とりあえず作品展に参加してみるのもいい経験になると思います。

田口 ご家族やご友人など、周りの方の反応はどうでしたか？

伊井 写真をまったく撮らない友人が見に来てくれましたが、「人の写真を見るってこんなに楽しいんだ」と言ってもらえました。「おもしろいくらいその人のカラーがあるね」という感想でした。

飯島 私の場合は作品展に写真を出すまでの過程を、家族も一緒に楽しんでくれました。

評価の場ではなく学びの場

田口 では皆さん、やっぱり思い切って出品してよかったですか？

伊井 「どうしようかな」と思っているよりは、作品展を経験したほうが成長できますね。ダメだったところが明確になりますし、ここを気を付けようと思ったところが一番の進歩です。意識が変わり小さなステップアップになりました。それから、アルトフォーカスでは搬入作業から自分たちでやって、展示の準備があんな大変なことだと初めて知りました。

中島 私はこんな撮り方もあるんだということをほかの方の作品を見て感じたので、ますます写真を撮りたくなりました。個性が違うからいいですね。

伊井 出す前は評価を気にしていましたが、この作品がいいとか悪いではなく、他の人の作品から何かを学ぼうという姿勢が出品者のみなさんにありました。評価ではなく、学ぶために作品を出しているのですね。

田口 来年の作品展が楽しみです。それまでみんな頑張って精進しましょう。今日はありがとうございました。

取材・文=田口裕子



ステキ写真の秘密にせまる！

あの受講生に会いたい

取材・撮影を担当するのも受講生。毎号、数多くの受講生の中からお一人ずつ、ご自身の楽しい写真ライフについてお話をうかがいます。

Vol.2 吉仲 孝広さん

Profile Takahiro Yoshinaka

会社の夏休みを利用して奥様と一緒に国内外の海に潜り続けて十数年。海中写真に魅せられ、一眼レフを始める。2010年アルトフォーカスの「はじめての一眼レフ」を受講。受講生作品展に2回連続でモルディブ、沖縄の海の写真で参加し、すっかり「海男」のイメージが定着。



旅行パンフレットの海中写真に魅せられて

水泳、ボディボードが得意で、写真以外の趣味も海と相性がいい吉仲さん。これまでの旅行先もモルディブ、宮古島、石垣島、西表島、慶良間諸島の渡嘉敷島…と国内外の南の島が多い。

「海の写真にのめりこんだきっかけは旅行パンフレットで見た『珊瑚に熱帯魚が群がっている写真』でした。こんな写真を撮りたいって思ったんです。はい、海…じゃなくて、海中の写真を」

「今まで行った海で一番好き！」と大絶賛のモルディブで、海面付近で撮った1枚。



海中写真は魅力的だ。でも撮りたいと思い、さらにアクションを起こす人となると少数だろう。

「撮りたいって思って、誰かに教わるのではなく、雑誌で撮り方を学びました。水中写真に必要な機材を買って、スキューバダイビングもそれがきっかけで始めたんです」

でも最初のうちは、海男の吉仲さんをもってしてもなかなかのチャレンジだったようだ。



光の射し方が印象的だが「そこまで狙ってない」。一瞬の判断力が試される。

水中では止まっていられない！

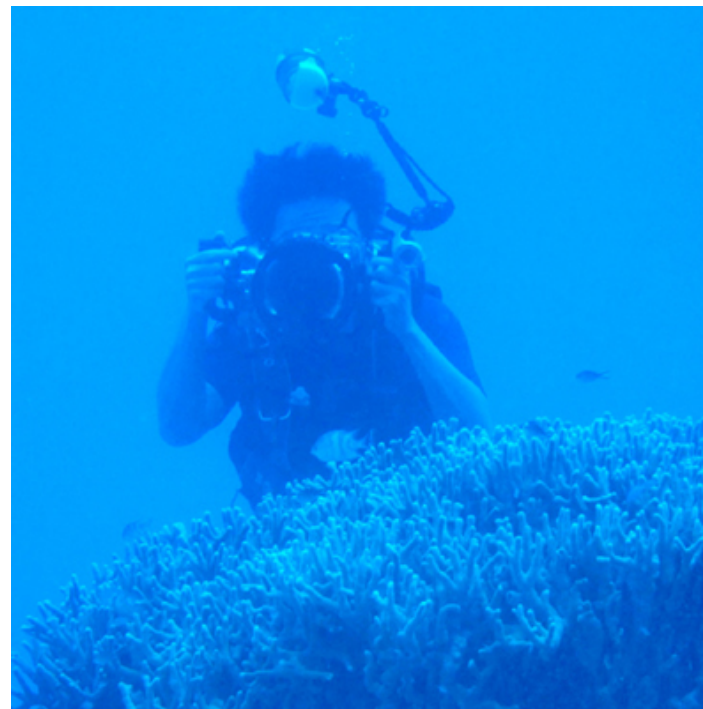
「まず、撮る余裕がなかったです。最初に潜ったのは、伊豆の富戸でした。ダイビングツアーに参加して一眼レフを持っていたのは私だけでしたね」

普通の観光ツアーに一人、撮影目的で入ってしまったような歯がゆさもあったそうだが、それだけではなかったようだ。

「海の中ではピタッと止まることができない。足とかで固定する動きが必要です。そして「これは！」と思ったら、スナップ写真を撮る感覚で」

海中写真はスポーツみたいなものかもしれない。水中を進みながら、魚群、光、視界に入る様々な要件を瞬時に取捨選択、構図を決めてシャッターを切る。

太陽の光が届かない深いところではフラッシュ必須だが、「プランクトンなど浮遊物もあるから、角度によってはフラッシュの光で真っ白になってしまうこともあります」。そんな話をうかがううちに、拝見する写真の1枚1枚がこの上なく一期一会なショットに見えてくる。



ダイビングツアーで撮影中の吉仲さん。
カメラは防水で耐圧性のあるハウジングという専用のケースに入れ、フラッシュを取りつける。「魚はすぐ逃げていくので、ゆっくりゆっくり近づいていくんです」

浅瀬の水の色や珊瑚が好き

ダイビング以外でも、シュノーケルで泳ぎながら撮ることもある。むしろお気に入りそこから生まれることが多いとか。

「光が届く浅瀬で撮ると、水の表情や砂の色がきれいに出るのがいいですね。ダイビングツアーみたいに時間に縛られず、好きなだけ探し回れます」

でも、せっかくの旅行、一緒にいる奥様は大丈夫なのだろうか？

「撮影に集中したいときは、ちょっと行って来るよーって、別行動ですね。好きなことをやっているのがいーいんじゃないと、理解してくれてると思います。甘え過ぎて、後からこの前の旅行はあまり楽しくなかったと言われないうに(笑)、そこは気をつけてます」

写真は「おみやげ」みたいなもの

海の写真を吉仲さんはすべて、リバーサルフィルムで撮影されている。

でもフィルムだと現像するまでどう撮れてるかわからないのは不安では？への答えにハッとした。

「現像が出てくるまでのワクワクがいいのかもしれませんが。帰ってからも楽しめるおみやげみたいな感覚でしょうか」

かつて写真はそういうものだった。現像した写真をドキドキしながら見返して旅を振り返る。便利さとひきかえに、そんな楽しみを忘れてしまっていたと。

イルカ泳法をマスターして一緒に泳ぎたい

今年の受講生作品展に吉仲さんは海の写真ではなく昨夏の旅行先、南フランスの作品を出展された。もしや路線変更？と思いきや、もっと撮りたいという気持ちにさせてくれるのは、「やはり海」と再認識する機会になったとのことだ。

「(海の写真を撮り続けられるのは)純粋に海が“好き”だから…ですかね。見たときの感動を伝えるために写真に残す、それが楽しいんです」

余談だが、吉仲さんがアルトフォーカスの「はじめての一眼レフ」講座を受けたのは一眼レフを使い始めてしばらくしてからという。

「オート設定だけでは物足りなくなり、ちゃんと基礎からやってみようと思ったのがきっかけです」



そんな向上心ある吉仲さんの次なる狙いは…？

「イルカと一緒に泳ぎながら撮ったり、ジンベイザメやマナティも撮ってみたいです。海亀の産卵も見てみたいです」

そして、アルトフォーカスで企画してほしいものは？という質問には、海好きの吉仲さんらしいユニークな答えが返ってきた。

「船に乗って海側から横浜を撮るとか。沖縄撮影ツアーはどうでしょう？秋野先生の故郷ですし…(笑)」

吉仲さんへメッセージ

取材当日はまだ風が冷たい3月某日。海をバックに撮影したいという私たちのワガママリクエストに、ニコニコ笑顔で応えていただき、ありがとうございました！

取材・文=山本玲子 撮影=宮澤範子

Check !

吉仲さんの他の作品をアップしました！

ぜひご覧ください！

<http://www.alt-focus.com/graph/02plus/a/>

モルディブ、沖縄などで撮られた海の写真を
見たら、今年の夏は南の島へ行きたくなる
かもしれませんね！



アルトフォーカスが大切にしていること

アルトフォーカスグラフ第2号では、創刊号に引き続き、写真家・秋野深(あきの・じん)先生にアルトフォーカスの運営や受講生の指導で大切にしていることについて、さらに詳しくお話を聞きました。

いつも新鮮な視点で身のまわりを観察する

——創刊号での「初心者意識を大切に」という話が印象に残りました。ぜひさらに詳しく聞かせてください。

秋野 写真って、カメラの機能を覚えたからそれだけでいいかというところではなくて、撮る被写体は毎回違うわけですね。行ったことがないところに行ったり、繰り返し行っても季節が違ったり、撮影するご自身の変化によって気がつきやすいものや好みが変わったり、ということがありますので、毎回新鮮な気持ちで被写体に向かえるかどうかはとても大事なことだと思っています。

しかも、写真を学んで上達したいと思う方々はとすると機材に詳しくなることばかりになりがちです。それでは写真の表現力は磨かれませんか、上達のためのバランスも悪いので…。長くやっていると、ある程度機材に対する慣れとか技術に対する理解も少しずつ増えてきますよね。でもそれだけが大事なわけではなく、初心者意識を持って身のまわりのものを観察したり、新鮮な気持ちで被写体探しをしたりということが大事なんですよということを強くお伝えしたいということが根本にありますね。

——私は、講座を受講してそういうお話を何度もうかがう機会があったから、「写真を撮ることが楽しい」という思いが持てるようになった気がします。

秋野 受講生の方々からの「写真を撮ろうと身のまわりを見ようとした時に、今まで気がつかなかったものに気がつけるようになったり興味を持てるようになったり、つまり違う視点を持てるようになった。それが楽しい」というご感想は嬉しいですね。それだけでもおそらくその方が撮る写真は、最初のころとはずいぶん違ってきているはずです。以前は気がつきもしなかったものに、目が向けられるというのは素晴らしいことだと思います。きっと日常生活がとても楽しいものになるはずですよね。

——そこに重点をおいているのがアルトフォーカスの特徴でもあると思うのですが、いかがですか？

秋野 そうですね。一般的には、機材について詳しくないし、取扱説明書を見てもどうもしっくりこないのので写真教室に行ってみる、という方が多いと思います。教室としても、カメラの機能のことや技術的なことを説明する講座が数的にも多いです。けれども決してそこだけに偏ることなくということを強く意識していますね。ですから、知識や技術については基礎を丁



寧に理解していただきながら、それ以外にも大切なことがありますよ、ということをいろいろなところで強調しています。

アルトフォーカスでは、露出の基本、シャッタースピードと絞りについて学ぶ「はじめての一眼レフ」という講座が多くを受講生にとって入口になります。しかしお話ししたように、機材のことばかりにならないためにも「基礎から磨く写真表現」という講座では、機材のことは少し置いておいて、被写体の観察、光と影、構図などについて重点的にお話しています。私としては、「はじめての一眼レフ」に並ぶもう1つの入門講座でもあり、ある意味一番重要な講座といっても言い過ぎではないですね。被写体をどれだけよく見ているか、撮るものを決めるまでにどんな工夫をしているか…そういったことは、意外と意識しないと、ほとんど多くの方は無造作に無意識に撮影をしています。ですが、実は自分が撮る写真をこれほど大きく左右しているものはないと思うんです。

——先生が講座の中で、写真を撮ることを車の運転や料理を作ることに例えて説明していたのもとても印象深かったです。

秋野 写真は、そもそもカメラを買ってきてシャッターボタンを押せば誰でも簡単に撮れてしまうものなので、そこがほかの趣味と違うところだと思うんです。全くできない人はいないわけですね。つまりすごく無意識にやれることなので、なかなかしっかり意識しましょうというのは難しいので、それを感覚的にわかって頂くために別のジャンルのことで説明をすることがあるんです。

設定や構図について学んだからといってすぐにそれを写真表現につなげるということは多くの初心者の方

にとって難しいと思います。でも設定や構図は、自分がその写真で伝わってほしいこと、記録したいことを写真としてできるだけ表現するために選んでいくようなものです。ですが時々、正解みたいなものが最初からあるかのような発想で、自分がどんな写真にしたいかを抜きに、こういう場所ではどういう設定・構図がいいのか、と結論だけかいつまんでやってしまおうとする方もいらっしゃるんですね。それでは身につかないということ、ずっと写真の説明をしても伝わりにくいので、車の運転に例えたりします。

「私は明日、車の運転をします。スピードは何キロ出したらいいですか？運転の上手な方に教えて頂きたいんです」と、ずっとその考え方でやっている限り事故を起こし続けるでしょう。信号が赤か青か、住宅街か高速道路かで、全然スピードは違う。しかも最初から何キロなんて決めることではなくて、ハンドルを握っているご本人が目の前をよく観察してスピードの調整をする以外にないことです。大事なことは何キロ出せばいいかではなく、車のスピードを決めるための判断材料は何か、何に気をつければいいのかですよ。

知識や技術について触れる講座の主旨は、自分で判断して自分でできるようになって頂くためにそうした基礎を作ることだと考えています。講師として質問されたからただ答えたということではなく、何のために説明しているのかという根本の部分は見失わないようにと思っています。

——他に大事にしていること、伝えたいことがありますしたら聞かせてください。

秋野 「失敗から学ぶこと」「まずやってみる姿勢」ですね。また例え話になりますが、写真は車の運転や料理に比べれば、いくら失敗してもいいじゃないですか。

車の運転は「いいからちょっと試してみなさい」と言われても危険すぎます。料理もあんまり試して失敗ばかりではさすがに食材がもったいないですよ。

ところが写真は失敗しても、何か致命的になることも、誰かに怒られることもない。そういう意味では、あれこれ自分で試してみることが非常にやりやすいタイプの趣味だと思うんですね。にもかかわらず、設定や構図に関して、てっとり早くなにか正解みたいなものを最初にかいつまんで知ってしまおうとする姿勢が強すぎて、たくさん失敗してそこから学ぶことがたくさんあるのに、それを避けるという方が時々いらっしゃるって、とてももったいないなと思いますね。短期間で技術をものにする人に共通していることなのですが、そういう方は学んだことを自分であれこれ試すんですね。とにかくまずやってみる。もちろんやみくもにたくさん写すということではないです。いろいろ試そうとすると最初はうまくいかないことも多いはずですが、そこで「どうしてうまくいかなかったんだろう」と考えたり質問したりするのでまたさらに具体的に吸収できるわけです。

大切なのは「撮りたい！」という気持ち

——創刊号でもうかがったことですが、それぞれの受講生が写すものについて、すごく自由度が高いですよ。やはりそれも大切にされていることでしょうか。

秋野 そうですね。それは今までお話してきたことより1つ前にあることかもしれないですね。カメラがあれば写真は撮れるので、次の段階で大事なことは、その人が何に興味を持って何を撮るか、ということですよ。



時々、「写真を撮る上で一番大事なことって何ですか？」という、とても難しくもあり漠然としたことを聞かれることがあります。大事なことはいろいろ思い浮かびますが、「被写体に対する関心」は大きいと思います。どれだけその方が、被写体や場面に強く興味を持っているか、どれだけ撮りたいと思っているか、それ以上に大事なものは多分ないだろうなとは究極的には思いますね。それがゼロだったら人は写真を撮らないですよ。

カメラについて学んだり教室にも通ったりしているけれど、ずっとその先続けていってどんどん上手になりたいという時に、礎になるものとして、何かひとつに決める必要もジャンルを絞る必要もないけれど、一枚一枚どれだけ「ああ今これを撮りたい！この場面を撮っておきたい！」という強い気持ちがその人に芽生えて撮っているか。そういう強い関心を身のまわりのものに向けていられる方なのかということは、とても大きいなと思います。

実は最近、それを強烈に感じる写真展を見に行きました。プロの方ではないのですが、岐阜の山奥で育った女性で、自分の生まれ育った村がダムの底に沈むことを知ってから、「村のことを撮っておこう」と、60歳を過ぎてはじめてコンパクトカメラを手にして、村を撮りはじめたんですね。結局、村はダムの底に沈みそ

の方は移住をすることになったんですが、移住後も村に通って88歳で亡くなるまで、村の建物も人も自然も片っ端から撮影して、10万枚以上の写真を残したそうです。もちろん各方面で取り上げられて有名になった方ですが、ご本人はおそらくただ懸命に懸命に撮り続けたと思うんですね。その写真は機材の設定に詳しい方が撮ったわけではないです。でもその方の作品群が強い力を持つのは、強烈に「撮りたい！」という思い、つまり被写体に対する強い関心を持って撮っていたからだということは言えると思うんです。

私たちも「被写体とは一期一会の出会い」という言い方をよくしますし、言われれば皆さんうなずいて下さるのですが、本当にそういう目で身のまわりを味わえているかということ、時間はぼーっとしていても過ぎていきますので、なかなかそんな気持ちで毎日を過ごして写真を撮っていることってないと思います。ですが、その方の写真は、そういうことをとても切実に伝えてくれるんです。撮りたいという気持ちを強く持って撮り続けた写真にしかない力をすごく感じた写真展でした。

自分の生まれ育った村がダムの底に沈むという強烈なことは誰の身にも起こることではないですが、自分の日常の中で何に関心を向けるかは、結局その人個人の価値観次第ですよ。二度と戻ってこない一瞬ということでは、本当は全部同じですよ。その中で自分が強く興味を持って自然に「撮りたい」と掻き立てられるものに出会えるかどうか。それ以上に大事なことはないかと。平日頃から思っていたのですが、その方の写真展を見て痛切に再認識させられました。

——受講生写真展でも、出品者の関心がそれぞれ違うということがよく表れていて、だからこそ見ていて楽しいということを実感しました。

秋野 それぞれ目を向けたものや関心を寄せたものが当たり前で違うことがよくわかると思うんです。それは驚くほど違いますよね(笑)。

受講生作品展で、あの人は毎年こんな写真を出す、と皆さんのイメージができていたりしても、それがご自身の中に変化があって好奇心が他のものに向いて、ガラッと変わることもありますね。「今まであまり撮ったことがなかったけれど、こういう撮影をはじめた」というような、その方の心の変化の話もおもしろいですよね。

受講生作品展は、いつの間にかお互いにそんな話題を提供する場でもあったりしますね。写真ってそういうコミュニケーションをもたらす力もあると思うのですが、だから、受講生作品展の大切な方針でもあるのですが、何を出すのかは自分で悩み抜いて決めて下さいということなんです。自分で興味を持ったものを撮って選んで皆さんの前に出して、コミュニケーションが生まれる。

今後は、受講生作品展とは違う形の発表活動も少しずつ考えていきたいと思っています。このアルトフォーカスグラフもそういう場として機能するようになれば嬉しいですね。

取材・文=飯島利枝子 撮影=大川幸治

写真教室アルトフォーカス

写真家・秋野深による個人運営の写真教室です。都内で、主に一眼レフ、ミラーレス一眼ユーザー向けの講座、撮影会、フォトコンテスト、受講生作品展、懇親会などを開催しています。

土日開催で、テーマ別に1～3回で終了する講座が中心です。どなたも新規対象の入門講座からご参加いただけます。

ウェブサイト : <http://www.alt-focus.com>

Facebook : <https://www.facebook.com/altfocusphoto>

お問合せ : alt-focus@alt-focus.com

秋野 深(Jin Akino)

1970年生まれ。福岡県出身。会社勤務の後、写真家・執筆家に転身。アジアやアメリカの自然風景、建築物、人々の生活や文化、日本の東北地方(鳥海山麓)の自然を撮影。クラブツーリズム海外国内撮影ツアー同行講師、写真講座講師。

JATA世界旅行博2008、JATA旅博 2011(於：東京ビッグサイト)にて講演。

2008年、ウズベキスタンの文化歴史博物館にて「独立17周年記念展示 秋野深写真展」を開催。サマルカンド平和と連帯の国際博物館にて永久常設展示。

2012年、NHK BSプレミアム『極上美の饗宴』の「シリーズ平山郁夫の挑戦(1)執念のシルクロード」にゲストナビゲーターとして出演。

近著『はじめてのイラン紀行 ラーハな時に身をゆだね』をアマゾンKindleより電子出版。

ウェブサイト : <http://www.jinakino.com>

Facebook : <https://www.facebook.com/jinakinophoto>

イベントレポート

■トラベルクラブ撮影ツアーを開催しました！

2014年4月13日(日)【栃木県栃木市・真岡市】

少人数での撮影ツアー(参加者9名)で栃木県へ。天候にも恵まれ、終日暖かい中での美しい春の花の撮影ができました。

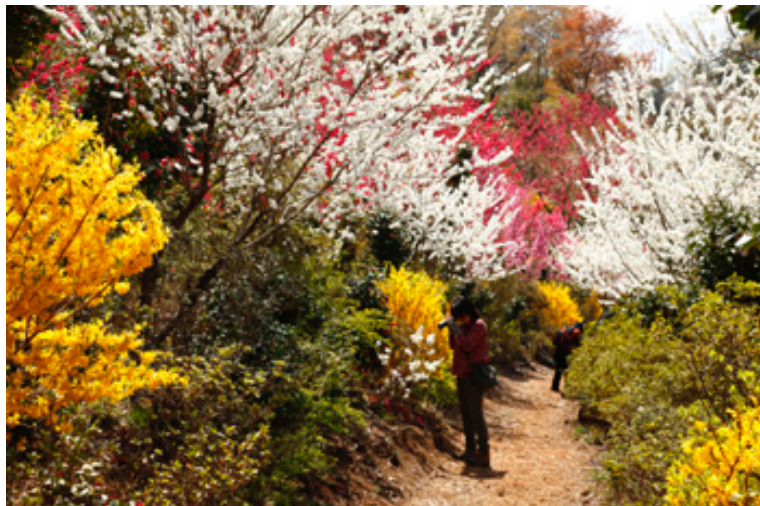
午前中は栃木市の大柿花山(栃木植物園)。桜が散り始め、色とりどりの桃の花、燃えるような黄色のリンギョウが丘の中腹に咲き誇る時期でした。大変珍しい黄色いカタクリも少しずつ開き始めていました。

午後は、桜と菜の花に囲まれてSL列車が走る真岡鐵道の撮影。煙を上げ汽笛を鳴らすSLの雄姿は最近では本当に珍しい光景です。

ツアー参加者からは「大柿花山の色鮮やかさに驚きました！」「黄色いカタクリをまた撮りに行きたい」「また列車の撮影に挑戦したい」とのご感想をいただきました。

参加者の方の大柿花山での作品を掲載しましたのでぜひご覧ください。掲載作品は、額装されて大柿花山にて展示される予定です。

Check！ <http://www.alt-focus.com/graph/02plus/b/>



Alt-Focusインフォメーション

■フォトコンテスト受賞のお知らせ

AFメンバーの堀みゆきさんの作品が、日本写真協会主催の「写真の日記念写真展2014」にて協賛会社賞を受賞されました。おめでとうございます！

受賞作品の『仲間と一緒に』(シンガポールで撮影した草花と鳥)は、新宿パークタワー・ギャラリー3にて展示されます。

会期:2014年6月20日(金)～23日(月) 10:30-18:00

詳細: <http://www.psj.or.jp/gekkan/schedule/contest2014/detail2014.html>

講師・秋野深からのお知らせ

■ディノスショッピングサイトで連載中

カタログ通販ディノスのオンラインショッピングサイトにて「写真家・秋野深のやさしい旅のフォトレッスン」を連載中です。旅行が大好きな方々向けに、旅の様々なシーンを想定したワンポイントレッスンで、コンパクトカメラ、一眼レフなどカメラの種類を問わず肩の力を抜いてお読みいただけます。写真について学んだことがある方にとっても大切な基本と言える内容です。

基礎編は2月に終了し、3月から月1回の更新でお届けしています。

★レッスン06：広がりのある景色の迫力を表現しよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson06/

★レッスン05：背景をぼかして、主役を引き立ててみよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson05/

★レッスン04：基礎編(4)主役を決めて、全体をよく見て！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson04/

★レッスン03：基礎編(3)ぶれ少なく、よりくっきりと！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson03/

Alt-focus GRAPH 第2号スタッフ

田口裕子(執筆)

写真展とその後の座談会で皆さんからいい刺激をもらい、「もっと写真が上手になりたい」という気持ちがフツフツと…。次は撮影ひとり旅(九州5日間)に挑戦します！

山本玲子(執筆)

創刊号からお手伝いをはじめて早や半年。この制作スタッフをしていてよかったと思うのは、写真に意欲的に取り組んでいる方から刺激を受けることができることです。

宮澤範子(撮影)

2回目も緊張しながら楽しく参加できました。この経験で写真に対する興味が一層わいております！

飯島利枝子(執筆)

第2号でも、秋野先生へのインタビューを担当して、とても勉強になりました。また、和気あいあいと楽しい制作ミーティング！素敵な仲間に出会えて心から感謝です。

大川幸治(撮影)

太田一郎(レイアウト・IT技術)

今回も制作スタッフとして参加しました。まだまだ手探りの部分が多いのですが、今後に向けたいろんな可能性を楽しんでいます！

秋野深(監修)

日頃の教室のイベント内だけでは見えてこない受講生それぞれの写真への思いが、取材をすると言葉となって表れてきます。講師としても一写真家としても楽しい経験です。

表紙写真：「水中花」なかくぼくにこ

透明で凸凹のある花瓶越しの撮影。するどい観察眼とアーティスティックな視点が成せる独創的な1枚。

Alt-Focus GRAPH 第2号

発行：写真教室アルトフォーカス

発行日：2014年5月10日

<http://www.alt-focus.com>

alt-focus@alt-focus.com